



1. 目的と概要

このプロジェクト事業は、「未来からの留学生」における講座の一つとして、外部からゲストを迎える特別講座の企画・実施と昼休みに行うイベントの企画・実施です。本年度はゲストとして、藤則 としみ氏（公立中学校教諭）をお迎えし、「映画づくりの実践による不登校生への取り組み」と題した講演と映画上映を実施しました。講演内容は、公立中学校のある学級が、文化祭に出展する映画づくりに取り組む過程において、学級の一人ひとりが不登校生徒と関わり、真剣に考えるようになっていくという藤則氏ご自身の実践についてでした。さらにその時クラスで制作した映画「遥かなる時の彼方へ・・・～39人39色」と、氏が担任した別のクラスによる「No!! bullying」の2作品が併せて上映されました。なお、この実践で藤則先生は、第50回読売教育賞最優秀賞（児童生徒指導部門）を受賞しています。

また昼休みイベントのゲストとしては、教育学部附属坂出中学校吹奏楽部をお迎えし、アメニティ広場において演奏を披露していただきました。

本年度で第6回となる「未来からの留学生」は、休日にキャンパスを開放し、香川県下の幼児・児童に大学という「学び」の場において学習や研究活動を体験してもらうことを目的として開催される教育学部の地域貢献事業です。

2. 実施スケジュール

平成19年10月7日（日）

「未来からの留学生 教育学部フェスティバル in 香大」において講座として講演会を、昼休みイベントとして吹奏楽コンサートを実施

3. 成果の内容及びその分析・評価等

教員をめざす学部生・大学院生の参加はもとより、公立学校教員の参加もみられ、直面している不登校の問題についてあらためて考えることができました。参加者にはアンケート調査への協力を依頼し、その結果次のような声が寄せられました。一部紹介いたします。

○ 実践された経験を先生本人からお聞きすることができ、また先に映画を観せていただいたので、話されたことが全てイメージでき自分がその場にいるような気さえました。本当に感激しました。

○ いじめ問題は未だになくなっていないし、解決方法も難しいと思うけど、映画をクラスで作成することでクラスがまとまっていったことがすごいと思った。解決法はないわけではないと思った。

○ 本日のすばらしい講演ありがとうございました。つながるということを忘れずにこれからも取り組みたいと思います。

○ 高校生が参加して下さったことがとても嬉しかったです。午前の講座にも参加しており、ぜひ本校に入学してほしいと思いました。映画2本ともとても感動しました。ありがとうございました。

○ 現在社会的に問題となっている「いじめ」や「不登校」について改めて深刻だなと痛感した。また教育への感心が高まった。

以上のように、内容に関しては賞賛の声をいただくことができました。

4. この事業が本学や地域社会等に与えた影響

地域の学習拠点となるべき大学のキャンパスに多くの子どもたちと保護者の方々を招き、子ども、学生、保護者、教職員らが楽しく交流するという、地域に根ざした大学ならではのイベントを体験することにより、子どもたちは、大学を身近に感じ、将来、本学で勉強してみたいと感じてくれる契機の一つとなったと考えています。

5. 自分たちの学生生活に与えた影響や効果等

近い将来に学校教員として、また生涯学習・社会福祉等の社会的サービス関係の職種に就くことを考える私たちは、イベントに企画段階から意欲的に取り組み当日を迎えています。大学生として日常の生活では接する機会のない様々な人たちの交流と協働を通して、充実感と達成感を持ってイベントを終えることができました。

また同じ日に開催されるオープンキャンパスに、今回も多くの高校生の参加がありました。高校生にとっては、イベントに主体的に熱心に取り組む大学生の姿を通して、自分の大学生活を具体的にイメージできる契機となったようでした。

6. 反省点・今後の抱負（計画）・感想等

反省点としては、次の2点が挙げられます。

(1)当初計画として申請したゲストが、スケジュールが合わず来ていただくことができませんでした。採択の決定以前に、ある程度スケジュールの打診等を行っておくべきでした。

(2)前述のように、企画の内容に関しては賞賛の声をいただくことができました。しかし参加者が30名程度に止まったことは今後の課題となりました。そのことについては、次のようなご意見をいただきました。次回への参考にしたいと思います。

○せっかくよいお話をお聞きできるのに、なんとかPRできないものか、残念ですね。県内の団体（校長会、園長会）を通じてできませんか？

○こんなにすばらしい講演はぜひ学生さんに聞いてほしいと思います。午後の講座の時間と重なっているのもっと多くの学生が聞くことができる時間がいいと思いました。

このことを踏まえ、来年度は内容の企画についてはもちろんのこと、PR等にも力を入れ

て取り組みたいと考えています。

7. 実施メンバー

代表者 三好 賢太郎（大学院教育学研究科 2年）

構成員 堀田 真央（教育学部 3年） 紀井 伸章（大学院教育学研究科 2年）

岡田 知也（教育学部教員） 高木 由美子（教育学部教員）

野崎 武司（教育学部教員）